

# フリウリ語の強勢音節における長母音について<sup>1)</sup>

Sulle vocali lunghe nelle sillabe toniche in friulano

山本真司

Shinji YAMAMOTO

0. はじめに フリウリ語<sup>2)</sup>の母音体系の特徴の一つは、強勢音節において、長短2種類の音量を区別することである:[la:t]<sup>3)</sup>「行ってしまった」(動詞[la:]「行く」の過去分詞男性単数形)～[lat]「乳」。本稿では、この現象の研究の歴史を概観し、問題点を明らかにしたい。文献を通して先行研究の内容を追うのみならず、山本自身の現地体験や調査などをも踏まえて、何がしかの新たな指摘ができればと思う。

1. 強位置と弱位置 フリウリ語研究の慣習では、長母音の現れる条件を満たしている音節(あるいはその母音)を「強位置にある」と言い、そうでない音節(あるいはその母音)を「弱位置にある」と言う。

フリウリ語の長母音・短母音の区別と、古典ラテン語の母音の音量の区別には、直接の関係は無いことが明らかになっている。フリウリ語の母音組織の出発点は、多くのロマンス語と同じく、長短の音量の区別の無いいわゆる俗ラテン語式の7母音(i e ε a o u)の体系である。以下、図式的に、俗ラテン語の強勢母音とフリウリ語の母音の対応を示しておく。なお、フリウリ語は、イタリア語やイタリア北東部の他のロマンス系諸口語と同じく、俗ラテン語の強勢の位置を比較的忠実に受け継いでいるので、俗ラテン語の強勢母音に対応する母音が、フリウリ語でも強勢母音になると考えてよい。

俗ラテン語		i	e	ε	a	o	u	
フリウリ語	強位置	i:	e:	i:	a:	u:	o:	u:
	弱位置	i	e	je	a	we	o	u

強位置の例 NIDU「巣」>[ni:t], SITI「渴き」>[se:t], PEDE「足」>[pi:t], NASU「鼻」>[na:s], NOVEM「9」>[nu:f], CRUCE「十字架」>[kro:s], CRUDU「生の」>[kru:t]

弱位置の例 MITTO>[met]「私は置く」, SEPTTE「7」>[sjet], (AL)LATA「行ってしまった」(女性単数形)>[láde], ROTA「車輪」>[rwéde]<sup>4)</sup>, RUPTU「壊れた」>[rot], NUDA「裸の」(女性単数形)>[núde], FRUCTU>[frut]「幼児」

一見、フリウリ語の長母音・短母音は、イタリア語のように、俗ラテン語の開音節・閉音節の区別に対応しているように見える。しかし、(AL)LATA>[láde], ROTA>[rwéde], NUDA>[núde]が示すように、開音節でも長母音が発達しない場合があり、俗ラテン語の開音節・閉音節の母音の音量からは(少なくともそれからだけは)、フリウリ語の長母音・短母音の区別を説明することは不可能である。

その理由はさて置き、長母音の発達する「強位置」は、次の2つの条件を満たす音节的文脈であることが、Francescato (1966)によって明らかにされている。①(俗)ラテン語において開音節をなす。②フリウリ語において閉音節をなす。そして、この2つの条件のどちらか片方あるいは両方を満たさない音节的文

脈は弱位置をなすことになる。

強位置の条件は、フリウリ語の長母音の発達が、ラテン語からフリウリ語への発達の途上で起こった語末母音の脱落（ちなみにこれはフリウリのみならず広く北イタリア全体に共通する現象である）と関係があることを示している。つまり、ラテン語の -CVCV# という構造から、語末の V が脱落し、残った CVC# において V が長母音となった（-CVCV# > -CV:C#）ということである。

ただし、-A は、通説に拠れば、主に女性形の特徴という重要な形態論的役割のゆえ、この語末母音の脱落が起こらなかった。こうして、-CVCA# は、他の形の音結合とは異なった発達を遂げるにいたる。

すると、問題は、語末母音の脱落に伴って、なぜ、ある場合には長母音が発達し、ある場合には発達しないという差が生まれたのか、という点ということになる。Francescato は、その理由を、語末子音の性質の違いに求めた。長母音を発達させなかった音節の音節末子音は、より「緊張した」tesa もので、長母音を発達させた音節の音節末子音は、「弛緩した」rilassata なものであった、と仮定し、その違いにより母音の長短が生じた、と考えた（PRATU > \*prat > [pra:t]「牧場」、FACTU > \*faT > [fat]「事実」、PACE > \*pas > [pa:s]「平和」、PASSU > \*paS > [pas]「歩み」、ただし T, S は緊張した子音）。しかし、「緊張した」「弛緩した」と彼が表現した音の音響的また調音的性質は具体的に説明されるには至らなかった。

**2. 強位置・弱位置の重要な例外** 検討に入る前に、いくつかの重要な例外について簡単に述べておこう。それは、響音に関するものであり、すでに Francescato の研究以来知られていて、例外といっても、その現れ方は規則的であり、きちんと説明がついているものである。鼻音の前では長母音化は起きない（MANU「手」> [man]）、r の前ではその起源にかかわらず母音は長母音化する傾向がある（CARRU「車」> [kja:r]）、l の前の母音の長短は、語彙的に規定されて決定され、ゆえに、ゆれを示すことがあり得る（VALLE「谷」> [val], [va:l]）、などである。

**3. 語末子音の交替** Vanelli (1979) は、母音の長短が、それに隣接した子音の違いと関連しているという Francescato の説より出発し、その違いが、実は有声・無声の差であることを明らかにした。長母音を発達させた音節 CV:C# の場合、語末の無声子音は、有声子音が無声化したものである（[la:t] < \*lad）と推定したのである。なお、現代フリウリ語では、語末の子音は、響音の場合を除けば、常に無声音である。

そのような有声子音のあるものは、ラテン語からフリウリ語に至る過程で起こった、母音間における無声子音の有声化の結果であると考えられる（例えば [la:t] < \*lad < \*ládo < LATU のように）。それに対して、短母音を含む語末音節 CVC# においては、語末の子音は常に無声音であったと考えられる（例えば [lat] < \*láte < \*látte < LACTE のように）。

それでは、なぜ有声子音の前の母音が長音化して、無声子音の前の母音は短くなったのか。Vanelli は、もともと有声子音の直前の母音は、無声子音の直前の母音とくらべて音声学的に比較的長く発音される傾向があったが、語末の子音が無声音化するに至って、この母音の長さの違いが音韻論的な価値を持つものと再解釈され定着したと考えた。そして、その根拠として、英語などでも見出される同様の現象 — 例え

ば *seat* ~ *seed* では後者のほうが母音がより長く発音される — を引き合いに出している。

強位置と弱位置の違いを生み出す差を、子音の有声性と無声性の違いとする考えは、「弛緩」「緊張」という表現よりもずっと明快であり、定説として受け入れられるに至った。その経過には、また、「弛緩」「緊張」という概念がフリウリ語の母音組織全般の説明にそぐわない事を明らかにした Trumper (1975) などの研究も、間接的に関与している。

しかしながら、長母音の発達を母音の長さの音素化で説明するという考え方は、必ずしもすべての研究者の同意を得るには至っていない。さまざまな反論の中で、有力なものは、代償延長的な考え方、つまり、脱落した語末音節のエネルギーが残った音節に受け継がれて長母音化が起こるとするものである。後に見るように、この考え方は、とりわけモーラ理論に基づく諸説に形を変えて受け継がれているように見える。

4. 通時論から共時論へ フリウリ語の長母音の研究は、通時論的な観点から始まったが、これを共時的な現象として捉えなおしたのが、Vanelli (1986) である。

ラテン語からフリウリ語に至るまでの過程で起こった形態音韻論的諸変化は、積み重なってフリウリ語の特徴を形作るのに貢献する。それらの諸変化のうち、いくつかのものは、現在でも生産的な価値を持つものとして機能し、イタリア語から語が借用される際、これに沿った変化が施される。例えば、語末母音の脱落は、ほぼ規則的に借用語に適用される (イタリア語 *affitto* 「賃貸」 > フリウリ語 [afít]).

さて、(イタリア語には母音の長短の音韻論的区別はないにもかかわらず) イタリア語からフリウリ語に借用された形においては一定の基準に従って長母音・短母音の区別が作り出される。多くの場合、それは、イタリア語における母音の音声学的な長短に従っている (イタリア語 *istituto* [istitú:to] 「研究所」 > フリウリ語 [istitú:t]). Vanelli は、そのような借用語の場合も、ひとたび長母音・短母音の区別が定められると、その区別が、後続の子音の有声音性・無声音性と関連づけられることを明らかにした。

Vanelli は、まず、*impiegato* [impjegá:to] 「従業員」、*delicato* [deliká:to] 「繊細な」、*istituto* [istitú:to] 「研究所」、*bandito* [bandí:to] 「追放者」、*steccato* [stekká:to] 「やせっぽち」、*reddito* [réddito] 「収入」、*debito* [débito] 「負債」、*affitto* [affitto] 「賃貸」、などのイタリア語の形がフリウリ語に借用されて、[impjegá:t], [deliká:t], [istitú:t], [bandí:t], [steká:t], [rédit], [débit] <sup>5)</sup>, [afít] となることを確かめる (イタリア語における母音の音声学的長さに沿ってフリウリ語の母音の長短が定められていることに注意)。

そして、これらの語に、女性語尾 [-e] あるいは縮小辞語尾男性形 [-út] を付与した交替形をつくり、その前の子音がどのように振舞うかを観察する。得られた交替形は、[impjegáde], [delikáde], [istitudút], [bandidút], [stekadút], [reditút], [debitút], [afitút], となり、交替形における強勢母音の直前の子音は、元の語形でその子音の前の母音が長かった語においてのみ、有声音に変わって出てきている。出発点のイタリア語形では、対応する子音はすべての語において無声音 [t] なのだから、フリウリ語は、自分自身の形の解釈によって、このような有声・無声の区別を共時論的に作り出したわけである。交替形の側から見ると、交替形に有声音を持つ語の場合にのみ、元の語形において長母音を持っている (CVC[+voice] →

CV:C[-voice] / \_\_\_\_#)ということになり、これは、基底形の子音の有声性が表層における母音の長さとの密接に結びついていることを示している。

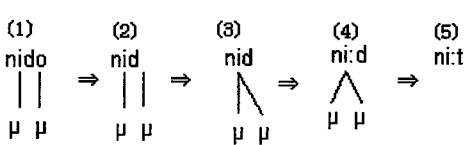
このような観察を積み重ねた後、Vanelli は次のように結論する。(1) フリウリ語においては、語末子音の直前に立つ強勢母音は、もしその子音が基底形において有聲の特徴を持っていれば、規則的に長母音となる。それに対して、語末子音が基底形において無聲の特徴を持っているなら、その前に立つ強勢母音は短母音となる。(2) ゆえに、語末子音の直前の母音の長短にしたがって、その子音が基底形において有聲・無聲のどちらの特徴を持っているか定めることができる。(3) 語末子音の直前に長母音が立っていれば (... V:C[-voice]#), 基底の語彙形に有聲子音を持つ形を想定するべき (...V:C[+voice]) である。

Vanelli が主張した、基底形における子音の有声性と表層における母音の長さとの密接な結びつきは、後述するように、いくつかの修正が加えられたが、語末の子音 [tʃ] に関する Yamamoto (1993) の研究や、仮想語における母音の振舞いに関する研究である Bais (1997) など、その確かさを立証する研究も出て、ほぼ定説となったと考えてよいであろう。

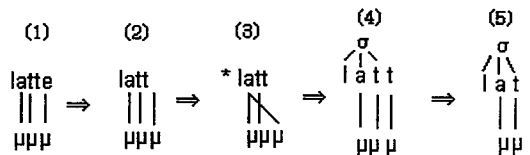
5. モーラ理論その他の立場から Vanelli の一連の著作に触発されて、さまざまな研究者が、生成音韻論や音韻論一般、あるいは言語の普遍性の問題から、フリウリ語の長母音の問題にを検討するようになった。そのような諸研究のいくつかを、Vanelli (1998) 自身が取り上げ、コメント・批評しているが、特に紙面を多く割いて取り上げているのは、モーラ理論に関するものである。

モーラ理論では、簡単に言うと、フリウリ語の長母音は、語末の母音が失われたことによって、それに結び付けられていたモーラが、代わりに前の音節に結び付けられて母音が長くなる、と説明される。その典型は、Repetti (1992) で、フリウリ語の長母音の起源を通時的に次のように説明する<sup>6)</sup>：(1) 最初の状態から、(2) 語末の母音落ちてそれに属していたモーラが浮き、(3) 浮いたモーラが前の母音に結合して、(4) 母音が長くなり、(5) その後、語末子音は無声音化する (図1)。

では、LACTE > [lat] のような場合は、なぜ長母音化が起きないのであろうか。Repetti はこの点に触れていないようであるが、Prieto (1994) が説明を試みている。それによると、(1) LACTE > \*latte となり、これが出発点で、(2) これに語末母音の脱落が起こっても、(3) 語末に残されたモーラの前は、その前にもう一つ別のモーラがあるため、それを横切って前のモーラと結びつくことができないので、(4) (5) その結果、残ったモーラが削除される形で、語末の子音の単純化が起こる (図2)。



( 図 1 )



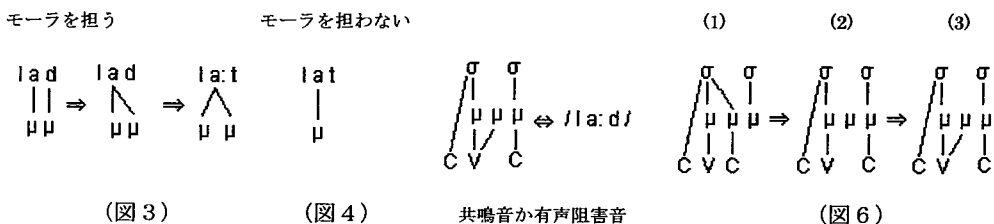
( 図 2 )

同じような論法で(ただし共時論な現象として)フリウリ語の長母音を説明しようとするものとしては、

Hualde (1996) がある。モーラが前の母音に結びつくことによって長母音が生み出されるとする点では Repetti や Prieto と類似しているが、有声子音そのものを長母音化を引き起こすモーラの担い手と規定している点が見える(図3)。それに対して、無声子音はモーラを担わないので長母音化を起こさないとされる(図4)。Vanelli は、有声子音がモーラの担い手で無声子音はモーラを担わないとの設定が、フリウリ語の音声的現実と合わない可能性がある(音声的現実としては、[la:t] や [láde] の [t] や [d] のほうが、[lat] の [t] よりも短い)として批判している。この点は後にまた触れる。

共時的な観点からは、Repetti は、通時態とは異なり、母音の長さも後続の子音の有声性も、すでに基底形において定まっていると考える(つまり、[la:t] < /la:d/ とみなす)。そして、/la:t/ のような形を排除するために(つまり \* [la:t] ~ [láte] のようなフリウリ語として不可能な交替を排除するために)、退化した音節 degenerate syllable に関する規則を想定する。簡単に言うと、長母音を含む基底形は、実は3モーラの音節ではなく、2モーラの音節(CVV)プラス退化した音節(C)であると解釈し、そして、そのような退化した音節を構成するCは、共鳴音か有声障害音でなければならないという規則を設定する(図5)。

変形した音節という概念の証拠として(つまり、このCがモーラと音節を担っている証拠として)、Repetti は、-rm, -rl, -ln などの子音結合をもった用例を引き合いに出し、これらの子音結合が語末に立つとき、語末の m, n, l が落ちることによって前の音節の母音が長くなっていること(/ferm/ > [fe:r] 「静止した」、/orl/ > [o:r] 「端」、/aln/ > [a:l] 「ハンの木」、/olm/ > [o:l] 「ニレの木」)を主張した。これを図示すると:(1) 語末の子音が落ちる、(2) その前の子音が落ちた子音のモーラに移る、(3) 残ったモーラが母音に結びつき、長母音化が起きる(図6)。



(図3)

(図4)

共鳴音か有声障害音

(図6)

(図5)

しかし、Vanelli はその用例の一つ一つに反論を加え、それらが、用例として疑わしいか、あるいは、少なくとも Repetti の説の実証には役に立たないことを示している。そのため、その分、Repetti の仮説は、説得力の欠けたものとなってしまった。

これらのモーラ理論の提案者たちに対して、Vanelli は、細部については批判を行ないつつも、総じて、彼らの説が、知られている限りの諸事実をうまく再現できるように規則を設定していることを認めている(ただ、有声音によって前の母音が長母音化するという説明の枠組みが自分の説におおむね一致するゆえ、Hualde の説にはより好意的であるようにも見えるが)。ただ、彼女の批判するのは、理論的枠組みの理論的整合性(それは当然あるべきものである)の有無ではなく、むしろ、これらの説がみな、アド・ホックな

(それ自体は否定も証明もされていような) 仮定に強く依存しているという点である。「規則の操作」に終始するような論法に対しては, Vanelli の目は厳しい<sup>7)</sup>。

6. 「問い直し」の必要性 モーラ理論を見ていて興味深いことの1つは, 同じ単語, 同じ形態でも, 研究者により想定するモーラの数がちまちまなことである。これこそ, モーラ理論の現在のあり方を如実に示している点ではないか。モーラという単位は, 実際の音の長さという生理的・経験的な現実を離れて, 純粋に理論上で操作・定義すべき概念になりつつある (フリウリ語学に限った話ではないようだが)。

もちろん, そのような研究のあり方が一概に良いとか悪いとか言ってしまうのは難しい。しかし, 言語学は言語事実に基づいた経験科学なのだから, 理論構築においても, 知り得る限りの事実をそこに盛り込むように努力しなければならない。そのためには, 絶えず言語の現場に戻って, 何かまだ新たに学び取るべきことがないかどうか, 何度も問い直してみる必要があるとなってくる。

そのような「問い直し」という観点からすると, もっぱら先行研究のデータを操作して規則を抽出するのにとどまっている (あたかも問題解決に必要な要件はそのデータで尽きているかのごとくに) 研究には限界があると言わざるを得ない。さまざまな理論がフリウリ語に応用されるのは結構だが, それが, 直接的な知識なしにフリウリ語に取り組む研究者の増加を意味するなら, 必ずしも喜べないことであろう。

本稿は, 問題を一挙に解決するような論理的枠組みの提案することを目指すものではない。フリウリ語と直接の接触を持つ者として, 言語現実の「問い直し」に少しでも役立つような提議を行なえればと思う。

7. 実際の音の長さ では, フリウリ語の長母音・短母音の実際の長さはどのようなものであろうか。山本の知る限り, 刊行資料で, フリウリ語の語末音節における強勢母音 (およびそれに隣接した子音) の長さを精密に測定したものは, Baroni / Vanelli (2000) しかないが, 母音の長さについては次のように結論付けている: (1) 有声子音の無声音化に由来する語末無声子音の前では, そうでない子音の前よりも母音が極めて長い。その長さの差は 2 倍に相当する。 (2) 語末の音節ほどではないが, 語中の位置でも, 有声子音の前の母音は, 無声子音の前よりも (聴覚印象的には必ずしも聞き取り可能なほどではないが) 幾らか長い。 (3) 語末の位置では, 無声子音に由来する子音は, 有声子音に由来するものより長い。

この測定の結果は, 基本的に聴覚的印象とよく一致していると言える。例えば, [fini:t] 「終えた」 (男性単数形) [finide] 「同 女性単数形」を, イタリア語の *finito* [fini:to] 「同 男性単数形」, *finita* [fini:ta] 「同 女性単数形」と比べてみると, フリウリ語 [fini:t] の [i:] は, 同じように表記されていても, 対応するイタリア語形の [i:] よりも, 聞き取れるぐらい長いことが多い。ちなみに, ある種のフリウリ語訛りのイタリア語では *finito* の [fini:t] の部分を, フリウリ語と同様に [i:] を非常に伸ばして発音する (Udine 大学のフリウリ語学担当教官 Piera Rizzolatti 氏にもご確認いただいた — 記して感謝申しあげる)。また, [finide] の [i] も, 短く聞こえることは稀で, むしろ, イタリア語 *finito* / *finita* の [i:] 並みに長いことも多い。ただし, [fini:t] の [i:] と [finide] の [i:] と比べると, 明らかに前者のほうが長い。

語末子音の長さについて参考になるのが, その前に短母音が来る語 — 例えば [afit] のような — の場

合、日本人の耳には子音の前に「つまり」が聞こえる（それに対し、[fini:t] の [t] の前には、そのような「つまり」は感じられない）ことである。これは、英語から日本語への借用語について、類似の音声的文脈で、「つまり」が置かれる（bat「バット」、hot「ホット」etc.）のと、似た現象であると言えよう。

山本も、フリウリの何十箇所かの地点で数百人のフリウリ語話者に耳を傾けたことがあるに過ぎず、Baroni / Vanelli の測定も、インフォーマントの数も非常に少数であり、これだけでは、統計的には十分な観測とは言えないであろう。とは言え、これらのデータが他の先行研究と大きく矛盾する点もないように思える。したがって、今のところ、フリウリ語の母音・子音の長さについては、代表例として [fini:t], [finide], [afit] をあげれば、強勢母音の長さの順は、強位置 [fini:t]（とても長い）> 弱位置で開音節 [finide]（長い）> 弱位置で閉音節 [afit]（短い）、子音の長さの順は、弱位置で閉音節末 [afit]（長い）> 強位置で語末 [fini:t]（やや短い）> 弱位置で開音節中 [finide]（短い）、と考えて差し支えないであろう。

以上のような実際の発音を念頭に置けば、例えば、モーラ理論も（長母音化を説明する鍵になるかは別として）、違った展開が可能ではなからうか。残念ながら、詳細な検討は別の機会に譲らなければならないが、

**8. 語末子音のレパートリー** Vanelli の立場は、それまで通時論的に論じられていた長母音化の現象を、斬新な発想によって共時態の立場から捉え直したものである。同じメカニズムが、共時態の観点からと通時態の観点からでは違った様相を見せることは起こるから、そのような観点の転換は正当であろう。

にもかかわらず、その説は、基本的には Francescato 以来の通時論を受け継ぎ、いわばそれを共時態に移しかえたものであり、その意味で、共時論としてはやや変則的な方法論に基づくものである。徹底して共時態の立場から現象を論じたいのであれば、歴史的経過はひとまず措き、フリウリ語の現況を徹底的に観察する、つまり、長母音・短母音の現れる音声的文脈をひたすら抽出、分類・整理し、そこから帰納的に何らかの結論を導き出すという、より普通の手続きに沿って問題を見直す必要はないのだろうか。

そのような観点から語末の音結合を網羅的に調べた研究は存在しないようだが、Yamamoto (1993) は、そのような方向を志向する研究の一環として生まれたものである。これは、通時論的な意味での強位置・弱位置の枠外に位置する [tʃ] / [dʒ] の交替を調べたものである。それによると、普通、語末の [tʃ] の前の母音は短いが、[dʒ] に由来する [tʃ] の前では、この文脈が動詞の変化パラダイムに組み込まれる場合に限り、いくつかの方言において、Vanelli が取り扱ったのと同じような長母音化が起きる：[distrú:dʒi]「破壊する」（不定法現在形）～ [o distrú:tʃ]「私は破壊する」（直説法現在一人称単数形）。この発見は、一方では、長母音化への傾向がいかに強いかを指摘して Vanelli の研究の基本的正しさの証拠の1つとなったが、同時に、長母音化に関する重要な例外事項としてそれ以後の研究の視野に取り入れられることとなった。

似たようなケースとして、[k] / [g] の交替にも触れておきたい<sup>8)</sup>。語末の [k] の前では、母音が短くなる傾向があることは、Pirona の辞書などに記録されていたが、Vanelli は、この現象が、彼女の調べた平野部の諸方言に関して、一般化された現象であることを突き止めた。それと前後して、山本は、フリウリ山間部の村 モンテナールス Montenars での調査の結果、この村の方言では、[dʒuk]「遊び」や [fuk]「火」に

おける母音が, [antí:k] 「古い」 における強勢母音よりも短いことに気が付いていた。

このケースでも, [tʃ] / [ds] の交替と並行したことが起こっている可能性がある。つまり, [k] の前で短母音化が起こる傾向があるが, [antí:k] に関しては, 曲用のパラダイム [antí:k] (男性単数形) ~ [antí:ge] (女性単数形) etc. に支えられて長母音化が起こっている方言もあると疑われるのである。なお, Vanelli は, [dʒuk] 「遊び」 や [fuk] 「火」 についても, u (< O) という母音の音色から考えて, 一度, 二重母音化・長母音化が起こった後に母音が短くなった (O > [ow] > [u:] > [u]) と考えるべきであると指摘している。

語末の子音に関しては, 注目に値するものがまだいくつかあるように思える。たとえば, [p], [ts], [kj] の前では, 母音は常に短い: [putróp] 「いくらかの」, [struts] 「ダチョウ」, [fóndákj] 「(コーヒーなどの) 滓」。実はこれらの子音が強位置・弱位置の対立の枠外に立たざるを得ないことは, 通時論的には自明のことなのだが, その事実を共時論的に積極的に位置づける試みはまだ存在しないようだ。

既に見たとおり Francescato の時代より知られていた幾つかの重要な例外に加えて, さらにこれだけの多くの制約があるのならば, フリウリ語の長母音化は, Vanelli の定式化から一見そう見えるような一般的な現象ではなく, 非常に限定された現象であると言うべきであろう (量的には非常に広範囲にわたる現象である — 数多くの単語や変化形を巻き込む現象である — にもかかわらず)。この点に留意してフリウリ語の音韻組織全体を見直せば, また新しい展望が開けてくるのではないだろうか。

ただし, 十分な根拠を持って説得力のある論を展開するには, フリウリ方言学の最良の伝統がそうしてきたように, 方言ごとの差異を細かく調べた上で, 共通体系を構築しなければならないであろう。言うまでもなく, 何十, 何百を数える — Francescato の研究や「フリウリ歴史言語民族地図」ASLEF の調査地点によればこの数字となる — フリウリ語の方言すべての状況を明らかにするのは, 容易な事ではないが。

## 注

- (1) 本稿は, 日本ロマンス語学会第 42 回大会での発表をもとに, 加筆・修正を施したものである。本来, 学会誌第 35 号に投稿すべきであったが, 遅れての執筆・投稿を許可して下さった同学会に感謝申し上げる。
- (2) 断りの無い限り, 本稿では中部方言 (または同方言に基づいたコイネー) の諸形を取り扱うが, 本稿の論旨の基本的な線は, 多くの方言に当てはまる。また, 方言によっては, 強位置の長母音の幾つかは, 二重母音に取って代わられる。例えば, CRUCE > [krows], [krúaf], etc. PEDE > [pejt], [piat], etc. のように。
- (3) 複数音節間の発音の強さの違いを語アクセントの前提とするならば, 単音節語にアクセントがあると言うのは問題になろう。ただ, イタリア語など幾つかの言語の記述では, 単音節語のアクセントは普通に想定されており, 慣用的にも言語学的にも根拠のないことではない。なお, 本稿では, 簡略化のため, 単音節語にアクセント記号を付していないが, これはまた別の問題である。
- (4) 弱位置では, さらに e > ε, o > ɔ となる傾向があるが, 方言差・音声的文脈による差があり (RUPTU 「壊れた」 > [rot] または [rɔt], しかし [róte] 「同 女性単数形」), 紙面の都合上詳細は尽くせない。



- (5) Yamamoto (1993) で指摘した通り, [rédit] と [débit] に関しては, -dit, -bit の部分が非強勢音節なので, ここで用例として用いるのは不適切と思われる。しかし, Vanelli の説明に沿ってここに加えておく。
- (6) 以下, モーラ構造の図は, もとの図を参考に山本が書き直した。音節  $\sigma$  の表示はしばしば省略した。
- (7) その批判の典型的なものは, みずから「フリウリ語については, (Hualde の) 論文に出された事柄以外のことは知らない」と言う Morin 1992 に向けられたものである。Morin は, 初期のフリウリ語では, パロクシトーン語においては, 強勢音節が開いていた場合, その母音は長くなったが, 語末母音が -A の場合には, 等時性上の理由で母音が長くならなかった (ゆえに CANTATU > [kɔntá:do] だが CANTATA > [kɔntáde]) という仮説を立てた。それに基づいて「PATREM, OCULUM, NIGRUM においては長母音を持つが, CAPRAM と NIGRAM においては短母音を持っているような方言が, フリウリ語には存在し得る」と予測した。この仮説に対して Vanelli は「(フリウリ語の) いかなる変種においても, 語末母音の音色に由来する母音の長短の区別は, 存在したことはない」と反論する (こう断言できるのは Vanelli 自身がフリウリ語話者で, 実際に現地で研究に携わっている強みからであろう)。彼女は「ゆえに Morin の仮説は, 経験論的には, 偽造されたもので, 考慮に入れられるべきではない」と結論づける。
- (8) 以下の [k] / [g] の交替についての話は, Udine 大学主催 フリウリ語翻訳通訳業務従事者養成講座 1998-1999 年度 (責任者 prof. Piera Rizzolatti) における特別講義「フリウリ語の強位置における長母音化について」において, Vanelli と山本によって行われた報告に基づいている。

## Bibliografia

- AA.VV., *Altante storico linguistico etnografico friulano* (ASLEF), diretto da PELLEGRINI, Giovan Battista, 6 voll., Padova, 1972-1986
- AA. VV., *Quaderno della grammatica friulana di riferimento*, anno 1998, numero 1, Udine, Forum BAIS, Maurizio, *La lunghezza vocalica nella lettura di parole friulane e di non parole*, in *Ce fastu?*, 1997.
- BARONI, Marco / VANELLI, Laura, *The relationship between vowel length and consonantal voicing in Friulian*, in REPETTI, Lori (ed.), *Phonological theory and the dialects of Italy*. Amsterdam, John Benjamins, 2000, pp. 13-44.
- BENINCA, Paola, *Friaulisch: Interne Sprachgeschichte I. Grammatik / Evoluzione della Grammatica*, in HOLTUS, Günter / METZELTIN, Michael / SCHMITT, Christian (a cura di), *Lexikon der Romanistischen Linguistik* (LRL) vol. III, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1989, pp. 563-585.
- FAGGIN, Giorgio, *Grammatica della lingua friulana*, Udine, Del Bianco editore, 1998.
- FAGGIN, Giorgio, *Vocabolario della lingua friulana*, Udine, Del Bianco editore, 1985.
- FRANCESCATO, Giuseppe, *Dialettologia friulana*. Udine, SFF, 1966.

- FRAU, Giovanni, *Friuli*, Pisa, Pacini editore, 1984.
- HAIMAN, John / BENINCA', Paola, *The Rhaeto-romance Languages*, London and New York, Routledge, 1992.
- HUALDE, J., *Compensatory lengthening in Friulian*, in *Probus* 2, 1990, pp. 31-46.
- ILIESCU, Maria, *Le frioulan à partir des dialectes parlés en Roumanie*, The Hague - Paris, Mouton, 1972.
- MARCHETTI, Giuseppe, *Lineamenti di grammatica friulana*, Udine, SFF, 1952.
- MORIN, Y. C. , *What are the historical sources of lengthening in Friulian?*, in *Probus*, 4, 1992, pp. 81-84.
- PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista, *Nuovo Pirona.Vocabolario Friulana*. 2a edizione, aggiunte e correzioni riordinate da FRAU, Giovanni, Udine, SFF, 1992.
- PRIETO, P., *Compensatory lengthening by vowel and consonant loss in early Friulian*, in *Catalan working papers on Linguistics*, 1992, pp. 205-244.
- REPETTI, Lori, *Degenerate Syllables in Friulian* in *Linguistic Inquiry*, 25, 1994, pp. 186-193.
- REPETTI, Lori, *Vowel Length in Northern Italian Dialects* in *Probus*, 4, 1992, pp. 155-182.
- RIZZOLATTI, Piera, *Elementi di linguistica friulana*, Udine, SFF, 1981.
- TRUMPER, John, *Obiezioni sistematiche all'uso dei tratti teso / rilassato nell'analisi di sistemi vocalici e di rotazioni vocaliche*, in *Lingua e Contesto*, 2, 1975, pp. 1-86.
- VANELLI, Laura, *L'allungamento delle vocali in friulano*, in *Ce fastu?*, 55, 1979, pp. 66-67.
- VANELLI, Laura, *Fonologia dei prestiti in friulano*, in HOLTUS, Günter / RINGGER, Kurt (a cura di), *Raetia antiqua et moderna, W. Theodor Elwert zum 80. Geburtstag*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1986.
- VANELLI, Laura, *Le Vocali lunghe del friulano*, in AA.VV., *Quaderno della grammatica friulana di riferimento*, anno 1998 numero 1, Udine, Forum, pp. 69-108
- YAMAMOTO, Shinji, *Alcuni ampliamenti dei casi dell'allungamento vocalico nel friulano*, in *Per Giovan Battista Pellegrini. Scritti degli allievi padovani*, Padova, UNIPRESS, 1993, pp. 645-655.
- 窪菌晴夫・本間猛「音節とモーラ」. 原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作編『英語学モノグラフシリーズ』15 研究社 2002 年.
- 田中伸一「アクセントとリズム」. 原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作編『英語学モノグラフシリーズ』14 研究社 2005 年.